ゆりかご 園だより

2025.6.1

先日、入所希望で見学に来られた方から「どうして異年齢保育を取り入れているのですか」という質問を受けました。私は「より大きな集団の中で子ども同士の関係性を広げることができるからです」と答えましたが、少し分かりずらかったような気がしたので、ゆりかごの異年齢保育に

ついて改めて考えてみました。

一般に異年齢保育には、子どもが少ないなどの理由でやむを得ず異年齢保育を行う「条件的異年齢保育」と、同年齢クラスの編成ができるのに、あえて保育についての理念や考え方の面からそれを行う「理念的異年齢保育」の二種類があります。ゆりかご保育園の場合は異年齢保育と年齢別保育を併せて行っているので「理念的異年齢保育」として実施しています。異年齢保育を導入した当時、父母と共有した資料の中に、その理念をよく体現した記述があります。

「異年齢保育は生活を共にする中でお互いを知りながら[頼る-頼られる]の関係をつくっていく。大きい子は、かつて自分がやってもらったことを今度はやってあげる機会として、小さい子はうまくできないことを安心して見せられる場として、どちらにとっても意味を持つ。そうした[頼る-頼られる]の関係性の中で自信や自己肯定感を育むことが異年齢保育の魅力なのだ」と。

年齢だけではない様々な子ども同士の関わりが、自信や自己肯定感を育てている様子は、現在のゆりかごの保育にもしっかり根付いています。

以前に、午睡明けに身支度やおやつ準備が進まない3歳の子を見た5歳児のRくんが、自分のことをそっちのけにして我先にとお世話をしていたことがありました。大人目線では「いや、まず自分のことやってからにしてよ～」と言いたくなるのですが、Rくんにしてみれば「早くやってあげないと他の子にお手伝いされちゃうから」と言っていたことが大変印象に残っています。そこには誰かの役に立ちたいという嬉しさが満ち溢れているように思います。

反対に、あひるぐみのときにはおしぼりをうまくしぼれなかったKちゃん。友だちの助言には一切耳を貸そうとしなかったのですが、あひるの後半に異年齢クラスに移行したとき「おしぼりやって」と自ら大きい子の近くに寄って行き、お願いしていたことがありました。そのときのKちゃんの行動の中には「ここには自分より大きいお兄ちゃんお姉ちゃん存在がある。できないときは力を借りればいいんだな」とそれまでの不安が安心に切り替わったことがありました。

これらは、ほんの一例ですが、子どもたちは日々、様々な年齢の子との生活の中で豊かな関係を育てています。

今月は異年齢のクラス懇談会が予定されていますので、改めて異年齢クラスの意味を考えるよいきっかけとなって頂ければ幸いです。